

2021 年 フランス海外スターージュ報告書

フランス語教育国内スターージュ運営委員会編

日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館

本報告書は、2021 年 3 月 18 日～21 日に実施された日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館主催のフランス語教育国内スタージュの修了者のうち、2021 年 8 月にフランス（ブザンソン）で実施された教員研修コースに参加した方々によるフランス海外スタージュの報告書です

ブザンソン夏季フランス語教員研修報告

鈴木真太郎

概要

2021年8月2日から15日にかけて、フランス、ブザンソンにあるフランシュ＝コンテ大学応用言語学センター（Centre de linguistique appliquée, CLA）にて、フランス語教員研修に参加した。研修中の宿泊先であるZenitudeはBesançon Viotte駅から徒歩20分、CLAまで徒歩5分という好立地にある。生活に必要なものは全て揃っており、おかげで快適な毎日を送ることができた。研修生の多くがフランス語教員であり、国籍はルーマニア、イタリア、トルコ、イスラエル、カメルーン、チュニジア、そして日本と実に多様であった。この研修を通じて私たちは、効果的にフランス語を教授する上で必要な方法、技術、ツールを学んだ。二週間におよぶこの研修はmoduleとforumから構成され、修了するには三つのmoduleと三つ以上のforumの受講が必須であった。今回は参加人数の関係でmoduleの選択はできず、私たちは予め決められた三つのmoduleを受講した。Forumは例年通り、複数用意され、任意の選択による受講ができた。Moduleとforumの講義時間はそれぞれ90分であり、moduleは30分の休憩と90分の昼休みを挟んで平日8時30分から15時まで、forumは15時30分から17時までであった。これらに加え、activité culturelleがあり、報告者はそのうちの一つに参加した。いずれの活動も大変有意義なものであった。以下はそれぞれの活動の概要である。

Les modules（2021年8月2日～14日）：

Module 1 (8h30-10h00) : Favoriser les pratiques ludiques et créatives – Francine BEISSEL

この module の主眼は、想像力を要するゲーム（rebus、charades、double sens など）を通じてフランス語特有の発音やリズムに学習者を親しませる手法を習得することにあつた。この手法の特徴的な点は身体を動かしながらフランス語を学ぶという点にある。実際に幾つかのゲームを体験したが、それを通じて私たちは語学学習、身体感覚、遊戯性の各要素を掛け合わせることの重要性を学ぶことができた。実用的かつ楽しい授業の実践を目指している発表者にとって、この module を通じて学んだ各種の手法は目から鱗であった。たしかに、学習者同士のインタラクションを多分に含むこの手法は、オンライン式授業に導入するには難しい部分もあるが、工夫次第でそれは十分解決可能である。オンライン式であれ対面式であれ、アクティブなフランス語学習を実現する上でこの手法は一

つの指針となるだろう。

Module 2 (10h30-12h00) : Mettre en place une pédagogie différenciée – Jean-Marie FRISA

このmoduleの主眼は、多様な背景をもつ学習者に対し、フランス語を適切に教授するにはどのような点に気を付けなければならないか、いかなるアプローチ方法が有効なのか、について理論の分析と実践を通じて体系的に学ぶことにあった。学習者の実態に即してフランス語を教授するには、クラスを構成する学習者の諸特徴を正確に把握しておく必要がある。この点、クラスのプロファイルを作ることが有効である。このプロファイルに即してフランス語を教授していくわけだが、実際に教え始める前に、どのようにフランス語を習得させるか、そのシナリオを具体的に描いておくことが重要である。ある日の授業で20世紀を代表する詩人、映画・童話作家として知られるJacques Prévertの*Au demeurant*という詩をみんなの前で暗唱するという宿題が課された。上手に暗唱する者もいれば、そうでない者もいた。講師はこの詩を覚えるためにどんな工夫をしたのか、各研修生に尋ねた。ひたすら書いて覚えた者、一切書かずにリズムで覚えた者、発音しながら書いて覚えた者など、その学習スタイルは多様であった。この課題を通じて発表者は、学習者の数だけ理解度に差があり、学習の仕方や動機にも違いがあることを忘れてはならないということと、対話を通じた教育の重要性を再認識することができた。

Module 3 (13h30-15h00) : Motiver les adolescents en classe de FLE – Linda MALDJI

このmoduleの主眼は、青年期の学習者を動機付けするために有効な素材としていかなるものがあるのか、それらを授業で活かすにはどうしたら良いのかを体系的に学ぶことにあった。映像、音楽、ボードゲームなど、学習者が主体的に学習に臨む上で有用な各種の素材を実際に体験したり、有用性について研修生同士で議論を重ねたりしながら、それらの効果と活用法を学んだ。なかでも印象的だったのは、講師が何冊かの教科書を各グループに配り、その中で一番良いと思える教科書を選択させ、その理由を代表者に発表させるというグループワークである。配られた教科書は違っても各グループが選んだ「良い」教科書には一定の共通点が認められた。このグループワークを通じて報告者は、教科書を選ぶ際、なにに着眼するべきか、ということと、教科書もあくまで素材の一部に過ぎず、何をどうして教えなければならないのかを教員の側が常に正確に把握しておくことがなにより重要である、ということとを学んだ。この授業を通じて知った各種の素材／ツールを今後の授業に適宜取り入れ、学習者の動機付けに繋げていきたい。

Les forums (15h30-17h00) :

1. Découverte de la médiathèque

CLA附属のメディアライブラリーの利活用の仕方についての講義であった。FLEに関するあらゆる文献や音声資料が揃っており、データベースについては日本でも利用可能である。

2. Visite du Fonds régional d'art contemporain (FRAC)

建築家隈研吾氏の設計による現代アート美術館である。学芸員の方が所蔵されているそれぞれの作品について丁寧に紹介して下さった。興味に富む作品ばかりであったが、世界的なコレオグラファーにしてアーティストであるWilliam Forsythe氏による*Nowhere and everywhere at the same time, n°3* (2014) という作品がとりわけ印象的であった。ただ鑑賞するだけでなく、一步踏み出すと思わず踊ってしまうという体験型のアートであるという点がこの作品の特徴である。

3. Chanson francophone (1) – Denis ROY

フランス語の授業におけるシャンソンの利活用に関する講義である。このforumは全2回で構成されており、報告者は初回の講義を受講した。フランスの伝統的な曲を授業で活かす方法を学ぶものと想定していたのだが、実際には必ずしもそうではなく、例えばフランス語の様々な略語を音楽に乗せて覚えるというDavid Cairol氏の*Initiales*という曲など、現代の曲についても幅広くご教授いただいた。他にも、歌詞を聴き取るというトレーニングなど、音楽を介したフランス語教授法についてさまざまご教授いただいた。

4. Visite du Musée des beaux-arts d'archéologie – Fanny MICHON

フランスの地方美術館のトップ5に数えられる美術・考古博物館である。ルーブル美術館よりも一世紀早い1694年に公開されたこの美術・考古博物館は、2018年に新装オープンしたばかりであり、ガロ・ロマン時代の石器から20世紀のマティスの作品に至るまで、幅広い所蔵品を有する。FRAC同様、所蔵品について学芸員の方が丁寧に解説してくれた。とりわけジョルジュ・ド・ラ・トゥールとフランシュ＝コンテ地方出身の画家クールベの作品が印象的であった。

L'activité culturelle :

教員研修第一週の週末、ブザンソンを流れるドゥー川のクルージングツアーに参加した。ご厚意により、無料でこのツアーに参加することができた。クルーズ船からでないといわうことのできない絶景は必見である。

その他

1. 休日の過ごし方について

報告者は所用のため、休日を利用してリヨンを訪れた。翌日に上述のクルージングツアーが予定されていたため、日帰りでのリヨン訪問ではあったが、朝早くにブザンソンを出発したため、十分な時間を確保できた。

2. 気温について

ブザンソンは避暑地として知られているが、今夏は例年以上に涼しく、15度に届かない日も珍しくなかった。一着くらい秋服を持参するのが無難かもしれない。

3. チェックインについて

報告者を含む日本人研修生は13時30分近くに宿泊先のZenitudeに到着した。ところがチェックインは、あくまでも受付が開く15時以降しかできないということで、90分近く待つことになった。幸い、そこに居合わせた夫婦が私たちをピクニックに誘ってくれたおかげで大変有意に時間を過ごすことができたのだが、このようなこともあるので駅でお手洗いに立ち寄る、あるいは駅のキオスクで軽食を買っておく、といった対策を講じておく方が良いのかもしれない。

4. 到着日が日曜日の場合の食料品購入について

あくまでも2021年9月時点の話ではあるが、Zenitudeから徒歩15分くらいのところにあるMonoprixの食料品売り場は日曜でも営業している。

5. パス・サニテールについて

フランスでは当時、美術館などの公共施設やTGVなどの公共交通機関だけでなく、デパートやレストランを利用するときもパス・サニテールと呼ばれるワクチン接種済み証明書、あるいはPCR検査などによる有効な陰性証明書の提示が必要であった。報告者は2回のワクチン接種が完了していることを証明するワクチン・パスポートという書類を持参した。あくまでも当時の話ではあるが、報告者が訪れた場所ではこの証明書は有効であった。

まとめ

世界的な新型コロナウイルス感染症の流行という危機の中での研修参加であったが、一連の講義やフォーラム、各国の研修生との対話を通じて学んだことは多かった。幸いにして研修生の多くはZOOMをはじめとするビデオ通話アプリの使用に習熟している。こうしたアプリを活用して、この研修で学んだことを、その後どのように授業で実践しているか、学んだフランス語教授法をさらに改善、発展させることはできないか、と議論を重ねていくことは可能であろう。その意味で、この研修で何かを学び、その後活かしているのかどうか問われるのはこれからなのである。今回の研修での学びを活かし、日本におけるフランス語教育の発

展に貢献していきたい。

最後になるが、今回のような得難い経験ができたのは偏に在日フランス大使館、とりわけMaxence Robin氏と萩尾英理子氏、日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会の皆様のご支援のおかげである。衷心より御礼申し上げます。また、CLAの講師とスタッフの皆様、あらゆる場面で報告者を支えてくれた二名の日本人研修生にも併せて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。



ブザンソンにある世界遺産Citadelleからの眺望

ブザンソンでのCLA夏期スタージュについてのレポート

村上 由美

本文書は、ブザンソンのフランシュ＝コンテ大学付属応用言語センター主催で実施されたフランス語教育教員研修に参加したことを報告するものである。

まず、日本フランス語フランス文学会ならびに日本フランス語教育学会に心より御礼を申し上げたい。今年度は、昨年度からひき続き、世界全体が新型コロナウイルス感染症に直面し危機的な状況にあるなかで、フランシュ＝コンテ大学付属応用言語センターが対面での授業を決断してくださったことで実現したスタージュであった。日本では東京五輪の影響もあり各地で緊急事態宣言が出されており、さらに各国においても出入国の制限が厳しく講じられ、渡航すること自体が非常に困難であったにもかかわらず、在日フランス大使館、フランス外務省、キャンパス・フランスが全面的に渡航を支援してくださり、このうえなく貴重な経験をさせていただいた。とりわけ、コーディネーターとして手厚いサポートをしてくださった在日フランス大使館の萩尾英理子さんには、心から御礼申し上げたい。

研修は、2021年8月2日から8月12日にかけてUniversité de Franche-ComtéのCentre de linguistique appliquée (CLA)で2週間にわたり開催された。今年度は、7カ国16名の参加者（日本からは3名の研修生）が参加した。本研修をとおして、フランス語教授法の最前線と理論にふれる機会に恵まれた。期間中、自身が選択したプログラムの内容と課外活動について、以下に報告してゆく。

授業はModule と Forum et Visitesで構成された。Module は、特定のテーマについて毎日（全8回）連続して行われる授業であり、今年は3つの講座のみ開講されることとなった。したがって参加者全員が同じ授業を一日3コマ受講するかたちとなった。Forum は、各回完結型の授業で、教室での座学もあれば、学外に出て見学する形式もある。Forumについては、数ある中から3つ以上選んで受講すれば修了要件を満たせることとなっていた。（受講した授業の科目名と時間数が「修了証」に記載され、証書は最終回に手渡される。）私は3つのModuleと、4つの Forum et Visitesに参加した。下記がその題目と内容である。

◆ Modules

1. Favoriser les pratiques ludiques et créatives (8h30-10h00) Mme. Francine Beissel

この授業においては、体を動かすジェスチャーを活用するアクティビティを通じてフランス語を習得する方法が提示される。教室内では毎回、机を使用せずに椅子を全員が輪になるように配置して開始された。とくに授業の前半では、

起立して身体を動かしやすい状態をつくることにより、全員が活発に動きまわり発言しやすくなる状況がうみだされ、そのなかで様々なアクティビティの提案がなされるかたちで進行した。初回の自己紹介ひとつとっても全身で行うゲームがとりいれられ、お互いの名前を覚えるのに効果的な方法が提示された。たとえば、自分の名前を紹介しながら自身の特徴を示すジェスチャーを行う、次の人がそのジェスチャーを使って前の人の名前を紹介した後に自分の名前を紹介しジェスチャーを加える、したがって、順をおうごとに紹介すべき人物が増え、名前とジェスチャーを覚えて紹介し続けるというものであった。授業も回を重ねる毎に難易度の増すアクティビティの提案がなされていくが、こうしたアクティビティを授業の前半で多用することで、クラスの全員が協力しあい、すばやく打ち解ける状況がもたらされることを各人が実感し、さらに各アクティビティのあとには講師からその理論と教育効果の説明がなされることで、各人が今後実践していく際、どのように応用可能かを学ぶことができる。

授業の後半では、グループで議論したり、チームで発表したりする作業が提案された。たとえば、各グループに1語のみかかれた用紙が配られ、その語をチームであてあうゲームをとおして表現力と語彙力を鍛えるアクティビティが提案された。机がなく椅子のみであるので、グループ編成もすばやく、活発に議論しやすい状況がつけられた。こうした授業スタイルは着席型の日本の大学での授業にそのまま応用することが難しいかもしれないが、グループワークの活性化に役立つヒントが数多く得られた。

2. Mettre en place une pédagogie différenciée (10h30-12h00)M. Jean-Marie Frisa

この授業は、異文化理解や社会背景についての教育をフランス語学習者の知識や学習意欲にむすびつけることをねらいとしたものである。毎回授業の導入として、フランス語圏のポピュラー音楽の曲が紹介され、異文化理解に役立つポイントが示された。初回の授業時に、受講者がどのような目的でスタージュに参加してきたのか、教育について考えることは何か、というアンケートがなされ、その回答結果をカテゴリー別で整理し、2週間の授業内容が組み立てられた。

したがって、毎回様々な方向からテキストや課題の提案がなされることとなったが、それらはすべて、ヨーロッパ言語共通参照枠が定めるレベルとそれに即した学習事項について考えるアクティビティとなっている。画一的にレベルを設定するのではなく、学習者の個性と習熟度ならびに教養レベルを考えあわせながら、目指すべきレベルについて考えていくことが提案され、受講者はそれぞれ自身の教育現場での体験を発表すること、また実際に自身が担当するクラス内で特徴的な生徒を紹介することが求められた。その後、様々な教育法(理論)が教示され、先に各々が紹介したそれぞれの生徒について、どのような教育法が

適切かを議論するアクティビティがなされた。

また、テキスト（料理のレシピ、詩、雑誌記事、等）を、グループワークを通じて解析し、その解析結果をもとに、同一テキストからA1からB1までの3種類の問題を創作していくアクティビティも行われた。この問題作成をとおして、各レベルに適した問題を作成するために意識すべき事項を、実践のなかで学ぶことができたことは、今後、実際に試験問題を作成していく上で大変役立つものとなると考えられる。

3. Motiver les adolescents en classe de FLE (13h30-15h00) Mme. Linda Maldji

この授業は、視聴覚教材や、子ども向けの知育玩具をもちいて、全身感覚を通してフランス語を学ばせることにねらいをおくものであった。授業の開始時には毎回ウォーミングアップとして、rebus（言葉遊び）やdevinette（なぞなぞ）、リレー形式での物語作成、など、フランス語特有の要素にまつわる遊びがおこなわれた。そうした遊びに軽い身体運動をかけあわせ、フランス語の語彙や文章を、遊びながら学ぶための企てが数多くなされた。

受講者は、小中学生から大学生、成人までを対象とする教師が集まっていたが、全員が初級から中級までのレベルを教えていることで、フランス語圏の玩具売り場で入手可能な知育玩具（人生ゲームやカルタなど）の活用が提案された。それらの玩具をもちいてグループワークで実践として遊び、そのなかから教育現場での有効性（語彙力養成や異文化体験等）を導き出すアクティビティがなされた。アクティビティのあとで、講師からのレクチャーがあり理論的裏付けと考察がなされた。

また、教科書分析のアクティビティもおこなわれた。レベルごとに何十冊もの教科書（フランス語圏で作成、出版された外国語としてのフランス語の教科書）が用意され、グループワークを通じて各教科書の共通点、長所、短所を分析するものであった。グループごとに3、4冊の教科書を分析対象とし、文法、会話、聞き取り、語彙、文化、などの項目別に、各教科書がどのレベルの学習者に有効なのか、到達目標や、目的を達成させるためには何が欠けていて、どのような補助教材が必要となるのかなどをグループで議論を重ね、発表した。明確な目標設定と的確な教科書使用法を提案しながら、学習者にとって効果的なフランス語学習法を考察することができた。この点は、すぐにでも実際の授業で応用活用できるものであり、現場で役立つスキルが得られる授業であった。

Modulesのまとめ

3つの授業に共通していた点としては、参加者には、しばしば、ジェスチャーやリズムや感情表現など、特定の条件に合わせて特殊な動きをつくりながら文

章を表現する練習や、グループ作業が繰り返し課されたが、全身感覚を通してフランス語を体感したあとに、教授法の理論的な裏付けがなされ、理論と実践がバランス良く学べるように工夫されていた点で、有意義であった。毎回、A1からB1までのレベルに対応した様々なアクティビティが提案され、日本にいたら思いもつかないような豊かなアイデアを数多く授けていただいた。

◆ Forum et Visites

Forumと Visitesは15時半から17時の時間帯に行われた。Forumは「Chanson francophone」(M. Denis Roy)を受講した。フランス語圏の数々のポピュラー音楽が紹介され、歌詞やミュージック・ビデオの分析をとおしてA1からB1までの授業に役立てるためのポイントが示された。入門者へのアルファベ学習の導入授業の際も、子ども向けのアルファベの歌(きらきら星)などで単調に陥らないための効果的な曲目が提案されるなど、各レベルや目的に即して、数多くの音楽が紹介された。

Visitesについては3つの講座に参加した。まず「Visite médiathèque」においてCLAの図書室を見学し、所蔵図書について説明を受け、CLAのITルームにて、フランス語教育におけるICTの活用法について各人がパソコン操作しながらレクチャーを受けた。

また、「Visite du FRAC (Fonds régional d'arts contemporains)」は、ブザンソン市内にある美術館を訪ねるというものであった。この美術館の建物は隈研吾によって設計され、自然木をもちいて市松模様をモチーフにした建築物となっている。館内には現代芸術(彫刻、絵画、舞踊作品の映像など)が収蔵・展示されている。学芸員によるレクチャーを聞きながら見学した。

別日に開催された「Visite du Musée des Beaux-Arts et d'Archéologie」も学芸員のレクチャーを聞きながらの見学であった。こちらはブザンソン市内の中心に位置する最も大きな美術館／博物館であった。フランシュ＝コンテ地方に関連する美術作品を中心に収集、保存されていたが、絵画だけでなく、当該地方で出土された紀元前の石器からローマ時代のモザイク画をはじめとする文化遺産や文化的所産が展示されていた。ブザンソンの近隣に位置するオルナンを故郷とするGustave Courbetの大作をはじめ貴重なコレクションが収蔵されている。

スタジエールは総勢16名という少人数であったこともあり、クラスの全員でつねに行動を共にし、今年度は各自が自由に企画して観光することになっていた近隣の美術館(時計博物館、ヴィクトル・ユゴー記念館、世界遺産の城塞)の見学、遊覧船でのブザンソンの街並み見学、郷土料理を味わう会なども、皆と共に情報交換したり企画して出かけたり、モジュールやフォーラムの先生方を交えてのピクニックやパーティーを開催したり、野外ライブの鑑賞会を企画する

など、授業後も休日も各国の参加者たちと毎日終日親睦を深め、充実した毎日を過ごすことができた。

今回のスタージュ全体をふり返ると、最新のフランス語教育法を学び、実践に活かしていくスキルを身につけることができたという点で、非常に貴重な経験が得られたが、それだけでなく、異なる文化背景のもとでフランス語教育に携わる各国のスタジエールと意見交換し、教育について考えを深めることができたことも大変意義深い経験となった。各国の参加者の年齢層も30代前半から50代後半にわたり、教育経験の豊富なベテランが集い、それぞれ異なる教育思想や課題の解決法について議論を交わしていくなかで、今回のスタージュに終わらないネットワークを築く機会が得られたことは、何物にも代えがたい恵みであった。このような機会を与えていただいたことに、重ねて感謝申し上げる次第である。

夏季研修報告書（2021）

米村 泰代

はじめに

コロナ禍にワクチン接種を1回しか受けられないまま、5歳の子どもを日本に残し初めて渡仏、CLAの夏期研修に参加しました。7月27日に出国、8月2日から12日までCLAにて研修し、15日帰国の全18日間の旅程でした。その間の貴重な経験を、以下まとめてご報告いたします。本報告書の末尾には、コロナ禍の中での体験についても触れます。

尚、わたしは、2016年から人口20万の島根県松江市で個人のフランス語教室を主宰しています。利用してくださる学習者は30代から70代の11名（2021年9月現在）で、目的は実用フランス語技能検定試験受験のため、留学、また生涯学習のためなど様々ですが、「フランス語を話せるようになりたい」という目標は共通です。しかしながら、小さな地方都市でフランス語を話す機会はほとんどなく、日本人教師のわたしがいかに学習者を鼓舞し、その意欲を維持できるか、ということが悩みの種でした。学習者の要望をできるだけ叶え、フランス語会話を促す実践的かつ効果的な手法を学ぶために、本研修を受けました。

研修

○食費

研修が始まって5日目の8月6日に研修中の食費として、約260ユーロを郵便局で受け取った。

○参加者内訳

当初16人。途中トルコの3人が別のクラスに変わったので、最終的に13人の研修生（内訳・トルコ4人、イスラエル2人、イタリア1人、カメルーン1人、チュニジア1人、ルーマニア1人、日本3人 合計13人）で、全員がフランス語教員。高校の先生が多かった。イスラエル、カメルーンやチュニジアからの研修生はネイティブだったこともあり、授業全体のレベルは高かった。板書はほとんどなかったと言っていいだろう。個人的に、授業の聞き取りは困難を極めた。以下、特に印象に残っていることを挙げる。

○授業

CLAからの指示で事前にモジュールを選んでしたが、7月中旬にCLAから連絡があり、今年は参加者が少ないため、研修生全員が同じ授業を受けることになった。

1 限目（8時半から10時）

Favoriser les pratiques ludiques et créatives Francie Beissel

○授業スタイル

机を使わないで、椅子を丸く並べての授業。教師と生徒の「境界」を取り払うためである。フランス語で答える際は何も見ないこと、と指示があった。初回の授業で、先生は授業中のスマートフォンの使用を快く思われなかったが、辞書アプリが入っていて単語を調べるためと伝えて使用を認めて頂いた。

○授業で学んだアクティビティ

初回授業向け

・2人一組になって互いに自己紹介しあう。全体発表では、自分のことではなく相手のことを紹介する。

例) Yasuyo・XXXペア

感想) YasuyoがXXXをクラスのみなに紹介し、次にXXXがYasuyoを紹介する。自分ではない「誰か」をフランス語で説明する力を養うトレーニングになり、ペアになった相手とのコミュニケーションアップを図ることもできる。

その他

1. 形容詞の使い方を練習

①主語＋動詞＋形容詞の文をまず立て、次にその理由を説明する。一人ずつ発表。

例) Je suis形容詞, parce que je....

Je suis triste, parce que mon chat est mort.

②次は否定表現。理由も考えて説明する

Je ne suis pas形容詞, parce que je....

Je ne suis pas triste, parce que mon chat a guéri d'une maladie.

2. parce que やmaisの使い方を練習

J'aime xxx, parce que xxx.

J'aime xxx, mais xxx.

例) 一人ずつ《J'aime mes amis, parce que xxx.》を発表。

2巡目は《J'aime mes amis, mais xxx.》に変更して発表。

3. 提示されたカードの中から生徒が1枚を選ぶ。そこに印刷された写真を、教室のみなにに向けてフランス語で説明する（写真を見せないで）。写真は、説明が

終わってからみなに見せる。

先生：Qu'est-ce qui se passe ?

Y： Je vois....

先生：Qu'en pensez-vous ?

Y： Je pense....

先生：À votre avis, c'est où ?

Y：(À mon avis) J'imagine....

4. Montrer ses expressions

先生：小さな紙を全員に配る

↓

生徒：頭に浮かんだ単語を一つ紙に書く

↓

先生：紙をすべて回収

↓

生徒：全部の中から一枚紙を引く。引いた紙に書かれている単語の意味を、その単語は使わず、別の言葉を使って1分間説明する。紙に書かれていた単語が何なのかを、みなに当ててもらう。

例) 引いた紙に書かれている単語が「bague」だった場合

1分間説明する際に使用されたフランス語

or, mariage, diamant, porter cet objet au doigt

感想) 基本的な形容詞の使い方から始める会話練習は、初学者が自分のことをフランス語で表現するきっかけとなる。早速実践してみたい。最初は《Je suisXXX.》の一文のみにして、次に《parce queXXX》をつけるとよいだろう。xxxの部分は家族や趣味など興味のある対象を選ぶとよい。同様に、parce que やmaisの使い方も練習できる。また、教師から同じ質問を繰り返し問われることは、疑問文に対する応答の効果的な訓練になる。また、自分が見たことや自分の考えをフランス語で述べることも発話を促す際に有効であり、大切な会話学習となる。わたしはこれまでは、文法を説明して終わりがちだったが、このモジュールを通して、学んだ文法事項を発話に活かすきっかけとメソッドを学ぶことが出来た。

2 限目 (10時半から12時)

Mettre en place une pédagogie différenciée Jean-Marie Frisa

○ 《Les questions sont très importantes.》

質問とは、Échange、Motiver、Différencier するもの

感想) 正直なところ、あまり面識がなかったり、語学レベルが高かったりするクラスメートとの授業の場合、どのような質問が飛び出すのかと、内心戦々恐々とすることがある。

このモジュールに参加して、教師の説明に対し学習者から質問が出ると学習者の理解は深まり、授業にさらに深みが出ると客観的に感じた。わたしも今まで以上に学習者が質問しやすい環境でレッスンを行いたいと思う。

○ *Différencier ; un aide-mémoire en quinze points* Philippe Perrenoud

一部抜粋

8. Les cycles pluriannuels sont des structures favorables à une organisation du travail plus flexible et plus coopérative (groupes de besoin, groupes de niveaux, groupes multi-âge, soutien intégré).

感想)

グループワークは若い学生が集まる中学高校や大学では特に有効だろうし、学習者が好む授業スタイルだと思う。実際この授業では3、4人のグループに分かれて課題に取り組む場面があったが、特に印象に残っているアクティビティだ。

その内容は、3人程度のグループに分かれて、各グループに配られたそれぞれに異なる内容の資料をもとに、授業で使うプリントを作成するというものだった。わたしは、イスラエルとトルコの研修生と同じグループになり、オレンジをくり抜いたデザート《Coque d'orange farcie aux fruits》のレシピをもとに、授業で使うプリントをA1からB1までの3つのフランス語能力レベルで話し合った。所要時間は30分程度だったように思う。プリントはグループの一人が放課後に作成して先生にメールで提出。次の授業でクラス全員にプリントを配り、発表。

Coque d'orange farcie aux fruits



レベルA1

レシピを見て大まかな内容を理解できることを目標に設問を考えた。

質問 1 何のプリントですか

Q1 Choisissez la bonne réponse.

- A. une BD B. un tableau de Picasso C. une recette

質問 2 レシピに登場しない果物はどれですか

Q2 Barrez les fruits qu'on ne trouve pas dans la recette.

- A. la mangue – les cerises – la pomme – le kiwi
 B. le melon – la poire – la banane – la pêche
 C. la pastèque – l'abricot – l'orange – du raisin

質問 3 空欄に入る語を選んで、レシピを完成させなさい (文章抜き出し)。

Q3 Complétez avec des mots de la boîte à mots.

saladier , frais , orange , coques , quartiers , fruits , morceaux

- A. Coupez en deux une _____ .
 B. Placez au _____ jusqu'à la dégustation.
 C. Répartissez les demi _____ d'orange.
 D. Coupez les _____ d'orange, la pomme, la banane en _____ .
 E. Mélangez les trois _____ dans un _____ .

レベルA2

質問1 これらの動詞と結びつくイラストを選びなさい

Q1 Associez l'objet à l'action.

A. Vider



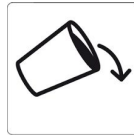
B. Ajouter



C. Couper



D. Mélanger



質問2 適切な手順に並び替えなさい

Q2 Mettez les actions dans l'ordre.

- A. Mélangez les trois fruits.
- B. Coupez les quartiers d'orange.
- C. Coupez en deux une orange.
- D. Répartissez les 3 fruits dans les demi-coques.
- E. Videz l'orange.
- F. Placez au frais.
- G. Ajoutez du sucre roux, un citron pressé.
- H. Gardez les demi-coques de côté.

質問3 設問は正しいですか

Q3 Vrai ou faux

- A. On coupe en deux l'orange. V F
- B. On coupe l'orange en morceaux. V F
- C. On épluche l'orange. V F
- D. On mélange la pomme avec l'orange. V F

レベルB1

質問1 レシピの手順をまとめた説明文に、必要な語句を埋めて文章を完成させなさい。

Q1. Complétez le texte.

Pour _____ une coque d'orange farcie aux _____, il faut _____ une orange et _____ vider. Ensuite, il faut _____ les demi-coques de côté. Et couper les _____ d'orange ainsi que la _____ et la banane en _____, Enfin, vous devez _____ les trois fruits dans un _____ et les _____ dans les demi-coques d'orange. Pour terminer, il est recommandé de les _____ au _____ avant la _____.

質問2 Couper, Mélanger, Répartir の動詞を用いて、果物を使った別のデザートのレシピを書きなさい。

Q2. Écrivez une autre recette (un dessert avec des fruits) en utilisant les verbes d'action (couper- mélanger- répartir...)

○感想

イスラエルとトルコの研修生二人から次々と意見が出されて課題がどんどん出来上がっていく中で、取り残されないように彼らの発言を理解し、自分の意見を言うのに必死だった。また、授業で扱う課題の捉え方がわたしとは違うことに驚いた。わたしはどうしても文法的な視点でアクティビティを考えてしまい、「動詞と結びつく前置詞を選びなさい」とか「動詞を活用させなさい」などの設問を提案したが、文法を重視し過ぎる日本人的な発想だとグループ内で言われ、採用されなかった。なぜなら、彼らは「フランス語能力をいかに実生活で活用できるか」という視点でフランス語教えているからである。レシピを見て実際に料理するという、実生活に密着した視点でアクティビティを考えていると感じた。そのために、前置詞や動詞の活用よりもフランス語の運用力が試されるのである。

わたしが教える学習者は全員、話せるようになりたいと思ってフランス語を学んでいる。このスタージュの延長で、学習者の意欲を高める効果的な教授法を幅広く学び、日本人の成人学習者一人一人の学習目的に適した教え方を実践していきたいと思った。

また、授業中、急に、グループの発表をわたしが代表して行うことになった。これまで発表はネイティブかそれに準ずる研修生が担ってくれていたもので、自分に回ってはこないものと思い込んでいた。わたしには初めてだったので、かな

り焦って緊張したが、やはりフランス語で発表ができることは、フランス語教員にとって必要なスキルだと思った。

このアクティビティの題材は、フランスで実際に使われている、生活に則したものがよい。

3 限目 (13時半から15時)

Motiver les adolescents en classe de FLE Linda Maldji

○教科書を客観的に分析・評価した。使用したプリントを一部抜粋して以下に示す（現物は4枚）。

Fiche pratique :

*LE MANUEL, L'APPAREIL PEDAGOGIQUE : EVALUATION
par un groupe de professeurs de l'Académie de Poitiers sous la direction de Mesdames
BAUBEAU et REROLLE.*

《AIDE A L'ENSEIGNANT》

1. *Est-il d'un maniement facile pour l'enseignant?

*La table des matières fait-elle apparaître clairement le contenu notionnel/fonctionnel et la progression grammaticale?

2. *Est-il organisé : en leçons indépendantes en unités

(avec chapitres, sous-unités...)

(nombre d'unités :)

*Les unités sont-elles structurées de façon identique?

*Sont-elles organisées en fonction d'un point de vue :

Linguistique Culturel Méthodologique

*Sont-elles d'égale importance?

3. Niveau 1 : (6^e – 5^e en particulier)

*Sous quelle forme les contenus linguistiques nouveaux sont-ils présentés?

- dialogues

- autres

*Les dialogues sont-ils utilisables indépendamment les uns des autres?

* Y a-t-il suivi? (famille, même groupe de personnages)?

* Y a-t-il un contexte situationnel?

* Y a-t-il réactivation des acquis au cours de la progression?

感想) テキストを選ぶ際の基準は何か? 学習者のレベルや伸ばしたい技能によって違うだろうが、このプリントを使って教科書を評価すると、教えやすさや各ユニットの関連性、文化に関する情報が機能的に盛り込まれているかなどの点を客観的に分析できると思った。設問が細かいため、わたしは1時間かけてもプリントの最後まで作業できなかつたが、今後プリントやテキストを選ぶ際には、その学習を通してフランスの生活や文化を感じられるかどうか、新しい基準として取り入れたい。

○授業で学んだアクティビティ

初回授業向け

質問シートに書いてある質問にoui で答える人を探す。oui で答えた人の名前をプリントにメモする。

例)

Quelqu'un qui...

a récemment repeint ou décoré sa maison?

aime faire la cuisine?

a voyagé dans un pays européen (hors France)?

感想) このアクティビティは、質問に「oui」で答えてくれる人を見つけることが目的だったので、初対面の人に対して積極的に話しかけることができた。本活動を通して、気軽にいろいろな人とコミュニケーションを取りやすく、相手の名前を覚えるきっかけにもなった。日本では6畳間に長机を置いてレッスンを行っているため、このアクティビティのように机を取り払い教室の中を動き回ることにはできない。しかし、今回体験したアクティビティを、可能な範囲で、戦略的に取り入れていきたい。学習者にとって、テキストそのものから離れ、フランス語を使いながら実践的な経験を他者と共有しながら得られる学びは、大きいものだと思う。

○放課後の課外授業

最低2コマをとるように指示があった。どの授業を選択したかが、各自の修了証に記載される。修了証は、最終授業で渡された。

コロナ禍の中での体験について

出国

国内研修が終わって数日後の3月下旬に海外スタージュ研修の面接試験に通ったとのメールを大使館から受けとったが、実際に研修の実施が決まり知らせを受けたのは6月中旬だった。この約3カ月間は何とも言えない不安な毎日を経験した。研修が現地であるのかないのか、オンラインになるのか、もしフランスに行くなら5歳の息子はどうするのか、現地のコロナはどういう状況なのかetc、頭から離れることはなかった。

パスポートの準備と航空券の予約以外は、研修が正式に決定してから受講するための準備を始めた。日本でPCR陰性証明書を取得するのに35,000円かかった。経済的負担が大きくこの金額を忘れることはできない。その他、手指や衣類の消毒・殺菌スプレー、ウィルスをブロックする不織布マスク、免疫を上げると言われているお茶などを用意した。

現地事情

ブザンソンの医療事情は、事前にフランス大使館から情報提供いただいた。ブザンソン、パリどちらもワクチンパスポートがないと観光施設に入ることができなかった。このことは、ほぼ毎日情報収集していたが、事前に分からなかった。滞在している2週間のうちにカフェの利用にもパスポートの提示を求められるようになったが、TGVでは提示不要だった。わたしは2回のワクチン接種を終えていなかったため、PCR陰性証明書の提出を求められた。これは、72時間か48時間しか有効でない。ブザンソンでも近くのドラッグストアで簡単に検査を受けられる。ただし、バカンス中は休業しているところもあるので注意が必要。

CLA、スーパー、観光施設などの入り口には消毒液が設置してある。個人用にもバッグに携帯しておくのが安心だ。他国の研修生も携帯用を持参していた。屋外ではマスクは不要だった。

帰国

帰国の1週間以上前から、厚生労働省指定のPCR検査証明書が取得できる場所をブザンソンで探し始めた。結局、放課後を利用して薬局を訪問し、4軒目でやっと郊外にあるPCR検査専門の施設LaboratoireCBM25を教えてもらった。午後には検査を受けると、結果は翌朝メールで届くので、厚労省のフォーマットを印刷して再訪し、常駐する医師に押印のある手書きの陰性証明を作成してもらった。検

査費用は約44ユーロだった。この証明書を取得するために、CLAの事務の方にわたしの代わりに施設へ問い合わせの電話をかけて頂き、お世話になったことも書き添えておきたい。

検疫

検疫官の指示があるまでは飛行機から降りられない。検疫官からのアナウンスがあり、検査の撮影禁止とのこと。陰性証明書の確認と唾液の抗原検査が課せられた。結果は1時間以内にわかった。その後入国審査。飛行機が到着してから2時間半後バスに乗車して、大阪市内のホテルに移動した。弁当の支給あり。宿泊と弁当、飲み物は無料だった。事情があっても延泊は出来ないので、延泊の場合は自分で手配すること。移動に公共交通機関は使えないので、検疫所が確保する宿泊施設から歩いていて行けるホテルを探すとよい。隔離のためのホテル滞在中は部屋からは一切出てはいけない。ドアの外に出ることは禁止。

3日目に再度抗原検査を受けてから、ホテルを退出可能となった。家族に車で迎えに来てもらい、自宅で残りの自粛生活をつづけた。帰国した翌日から14日間、毎日居場所確認の電話を受けて、アプリによる健康報告をした。このような生活で、足腰が弱くなったのを感じた。

最後にコロナ禍における研修参加をご支援くださったフランス大使館、フランス語教育学会、フランス語フランス文学会、コロナ禍で参加人数が少なかったにもかかわらず研修を実施してくださったCLAに心より感謝申し上げます。今回学んだことを授業に活かして参ります。

以上